

「箸の持ち方」を検査項目の一つに取り入れた佐世保市の久田学園佐世保女子高校の入試が、1月31日にあつた。

同校によると、試験は6種類の物を箸でつまみ、約10秒離れた二つの皿の間を移動させる方法で行った。「出題したのは、小豆、

クした。結果は合否判定に一定程度反映させるが、速さを競わせた点数化するのではなく、生活習慣が身につけているかどうかを見ることが主眼だった。

久田順子校長によると、一番難しかったのは、小豆。緊張で手が震えていた受験生も少なくなかった。それで

徒は不利になるのではないか」という批判の声が寄せられた。

多くのメディアで取り上げられ、広島県の地元紙で記事を読んだ元小学校長からは「家庭生活でも学校生活でも、そのこと(当たり前のこと)ができていく児童生徒があまりにも多い。人をつくり育

ると報じられた。

「うちが入試に取り入れたからといって、世の風潮が現状を見直すまでには至っていない」。久田校長は残念そうだが、試験後に話しかけた受験生の一人は「以前はおかしな持ち方をしてきた。今は正しく持てるようになった」と答えたという。

西海評論



「箸」入試の波紋



大豆、お多福豆、ピー玉、おはじき、サイコロ。

これらをまず、右の皿から左の皿に一つずつ移す。続いて左の皿から右の皿に再び一つずつ。この動作を3分以内にも往復繰り返させ、試験官が箸の持ち

方や、きちんとつまめているかなどをチェックした。

も「移動中に落としたりはおろらず、練習してきた跡がうかがえた。合否判定に影響するほど下手な受験生はいなかった」という。

このユニークな入試は、実施前から反響を呼んだ。同校には「趣旨に賛成する」という

激励や、「海外から帰国したり障害のある生徒は不利になるのではないか」という批判の声が寄せられた。

てるとは、日々の生活をつくりと見つめ、見なおすことからはじまると私は信じています」と手紙が届いた。米国のニュース専門テレビ局・CNNでも紹介され、「日本の若者から伝統的な食文化や食卓マナーが失われつつあると懸念されている中で実施され

入試が受験生たちに定元(手元?)を見つめる機会を提供したことは間違いない。同校は来年も、改善を加えて「箸の持ち方」入試をする。投げられた一石の波紋がさらに広がっていくことを期待したい。

佐世保支局長 小野英行